

金沢蓄音器館にきた「盛田コレクション」

金沢蓄音器館長
八日市屋 典之

平成 28 年 3 月、金沢蓄音器館の電話が鳴った。それは SONY 創業者の 1 人である盛田 昭夫氏のご長女 岡田 直子さんからだった。

岡田さんのご両親が聴いていた蓄音器とリードオルガンの 2 台を受け入れてくれるところを探しているが、当館が相応しい候補か検討したいとのことだった。ついては月末に来館したいという。お越しいただくなら「蓄音器の聴き比べ」を聴いていただき、当館の想いをご理解いただくのが一番ではとお伝えした。

岡田さんは月末の多忙な時間をさいて日帰りの強行軍で来館された。14 時からの「蓄音器の聴き比べ」を聴かれたあと、すぐに当館への寄贈を申し込まれた。



父、昭夫さんが愛用したリードオルガン「アリストン 9 型」と母、良子さんが愛用した英国、E.M.G.社のマーク Xb (マーク・テン・ビー) の 2 台を「盛田コレクション」として末永く所蔵させていただくことになった。

こうして 4 月末当館に到着し、一部修理整備して 5 月のゴールデンウィークからその音色を奏でている。

アリストン 9 型 (外寸 : 39, 39, 23cm) と
ミュージック・シート

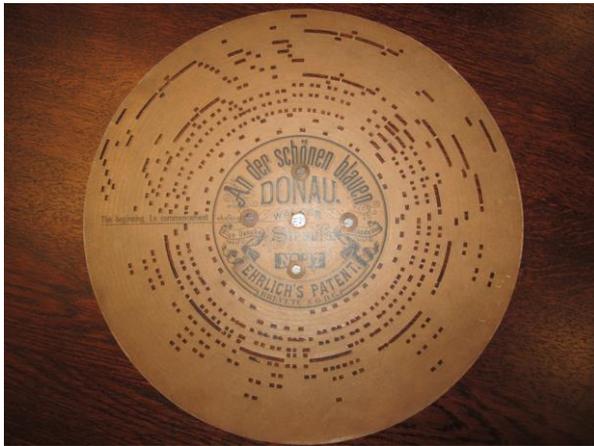
リードオルガン「アリストン 9 型」の音色

さて、リードオルガンには 15 枚のミュージック・シート (音が入ったオレンジ色の紙製の直径 33 cm の盤) も含まれていた。ただ、盤には独、仏、伊、英で書かれた文字がいろいろあり、オーケストラ・アンサンブル金沢のバイオリニストである大村俊介さんにお尋ねし、翻訳した。曲目は、「美しき青きドナウ」、「酒・女・歌」、「ジプシー男爵」、「ワシントンポスト」、「タンホイザー行進曲」など覚えのある曲も多い。

また正確な曲名がわからないものも多くあった。例えばオペレッタ「地上の悪魔」より悪魔のマーチ?、オペレッタ「魔法の城」より何と深い海よ?、「私は小さな郵便配達員」? など。マーチ、ワルツ、ポルカ、ギャロップ、オペレッタなどが多くあり、当時の流行が感じられる。

オルガン本体には、品名、型番などの記載がなかったため六甲山のオルゴール館学芸員、山川

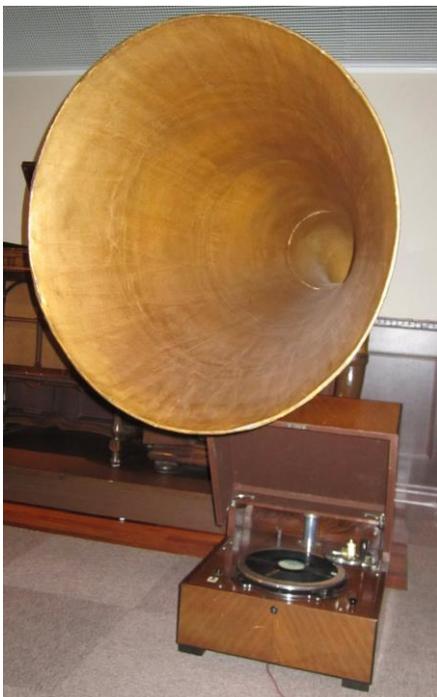
佳乃副館長に尋ねた。現物を見ずに写真だけで判断すると、エーリッヒが作ったドイツ製のアリストン9型ではないかとの連絡を受けた。外寸（縦、横、高さ）が39, 39, 23cmでちょっと小さいが1900年頃作られたものではないかという。発音体はリードオルガンで、24音。手廻しでハンドルを回すと、柔らかなオルガンの音を大きな音量で奏で、十分楽しめる。明治の時代には何万台ものアリストンが欧米で売れたという。



「美しき青きドナウ」のミュージック・シート（紙製）

最先端の技術を追求していた SONY 創業者の盛田さんがこんな素朴な音色を聴いていたとは！仕事で疲れた体を休ませるときに聴いていたのだろうか、どこか優しくホットする感じがするのだ。

立体的に聴こえる英国の紙ラッパ蓄音器



もう1つの贈られた蓄音器は、英国 E.M.G.社が1933(昭和8)年ごろ作ったというマーク Xb (マーク・テン・ビー) だった。

この社の蓄音器の特長は、ハンドメイドされた独特の音の入り口であるサウンド・ボックスと本体から垂直に90度に曲がった紙製(パピエ・マーシュ)ラッパである。素材はロンドンの電話帳という説もある。H.M.V.、ビクターなどの高級機種の高級機種よりも奥行きがあり、立体的に聴こえる。人の声が身近に聞こえ、演奏がその少し後ろから聴こえるのだ。針がレコードと擦れる際に出るスクラッチノイズもあまり気にならない。紙製ラッパのお陰だろうか。ナット・キング・コールの「プリテンド」のSP盤をかけたところまるで目の前で歌っているように聴こえた。

ラッパの口径は75cmの円形で巨大だ。ゼンマイ使用でなく電気モーターでターンテーブルを回転させているが、

E.M.G.マーク Xb (マーク・テン・ビー) ラッパの口径は75cm。

音は電気を使わず針でレコードの溝をなぞっているだけだ。その音量の大きさには驚きを禁じ得ない。

当館に運ばれて点検した際、モーターを動かすための電気コードがよじれていた。このまま通電するとショートする恐れがあるのでコードは新しいものと交換した。またターンテーブルの下には電圧を変換するトランスが内蔵されていたが、これも修理した。



電気系統は壊れていたが、電気を使わぬ箇所はオイルやグリースを補充し綺麗に磨いただけだった。案外単純な部品の方が長持ちするものと変に感心した。

今、1日3回の「聴き比べ」でこの E.M.G. 社のマーク Xb とリードオルガンの音色がお聴きいただける。聴かれた方は、皆一様に音の立体感とその音量の大きさに拍手を送る。昭和初期、すでにすごい音が英国にあり、豊かな音楽生活があったのだ。

蓄音器館 2F 聴き比べコーナーに展示された
2台(右: アリストン9型、左: E.M.G.マーク Xb)

盛田昭夫氏との“えにし”

偶然か1枚の写真が出てきた。それは盛田 昭夫さんと父である当館の八日市屋 浩志 初代館長がツーショットで納まっている昭和50年代の写真だった。縁(えにし)を感じている。世界のSONYの「盛田コレクション」が当館に増えたことは誠に光栄なことに感謝に堪えない。



1日3回(11、14、16時)の「蓄音器の聴き比べ」で「盛田コレクション」の音を多くの方々に是非聴いていただきたいと願っている。

盛田 昭夫氏と初代館長 八日市屋 浩志氏(昭和50年代)

筆者プロフィール

八日市屋 典之（ようかいちや のりゆき）



慶應義塾大学法学部卒。

金沢市を中心にレコード、オーディオ販売の卸、小売店を経営。
アンサンブル金沢をはじめ金沢にし・ひがし芸妓連、地元にゆか
りのある歌手等の作品集など地域の音楽文化を盛り上げるため、
数多くのCD、DVDのプロデュース、制作を手掛ける。

平成15年11月より金沢蓄音器館館長。

金沢蓄音器館のホームページ <http://www.kanazawa-museum.jp/chikuonki/index.htm>